

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十年九月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十五巻第五号（通巻第一七三号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第173号

9. 2008

丸顔の鬼

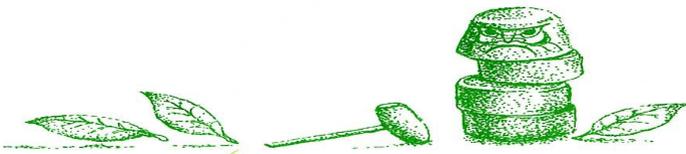
品川 鈴子

学習園謂はれを知らぬ花魁草

生きてると兎が目を見張る水中花

星合ひの蓬莱島で待つ亡夫

身につきし時速まちまち敬老日



木喰の鬼は丸顔初紅葉

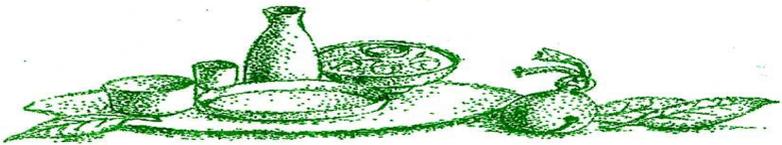
釣具屋の餌なるみみず夜は鳴くや

地べた売り秋刀魚一本おまけなり

城堀の数珠玉扱しとく煎じんと

バス停まる度に路肩の蝗跳ね

主おも太鼓背に芸みせて文化祭



# 玉

# 鈴

# 吟

愛媛 岡野峯代

枇杷を挽ぐ試食試食と若夫婦  
見過きひすごして踵返しぬ夏の萩  
似ね非農婦花見ず食ぶる早生隠元  
フルネーム言えて真顔の梅雨晴間  
風が言う小麦刈れ刈れ熟れすぎぞ

大阪 岡本 幸枝

黄麦の村東西に火伏せ神  
でで虫が鰻絵に惑ふ宿場町  
著莪の花ギヤマン煌めく長者蔵  
梅雨に入る木偶にべつたり岩絵具  
律儀にも地震の国からさくらんぼ

大阪 奥田 妙子

鶴鳴きつ低空飛行えごの花  
風薫る首をすくめて鶴十羽  
里山に鶴住みつきて青葉風  
塔上の鶴は巢立てり水田中  
みかん咲き児の目輝やく鬼ごっこ

東京 片野光子

はたた神我もしてみる放り投げ  
憂きことのありし日新茶届きたり  
箒目のみちよぎり行く牡丹の香  
薔薇の園アリス現れさうな径  
ひさびさに図書館にをり風五月

兵庫 勝野 薫

日ひが雀ち鳴く石山参道雨霽れて  
湿原地野花菖蒲に金網柵  
眺へし如く沙羅散る苔の庭  
滴りの洞くぐり抜け蓮如堂  
竹田川水嵩増えて濁り鮎

兵庫 金田美恵子

赤蜻蛉遊べりここは国境  
兵の馳せし道なり新松子  
一の谷奈落に潜む昼の虫  
底知れぬ一の谷覆ふ葛の花  
敦盛塚守る新蕎麦商ひて

兵庫 唐鎌光太郎

葉桜となりて再び天覆ふ  
新緑に染まりてコートボール追ふ  
薫る風コーラス流るる楠公さん  
昼寝覚今朝の出来事早や遠し  
六月のひまはり手持無沙汰風

兵庫 川合まさお

挽白の飛石並ぶ花壇  
水浴びの雀に映ゆる新樹光  
白牡丹葉蔭にひそむ鬼瓦  
遠足の声湧き出づる地下出口  
風薫るひねり飛び交ふ村歌舞伎

大阪 河村 泰子

福助に似て陶匠は藪座布団  
柿若葉伝馬所跡の郵便局  
子燕は伝馬所跡に飛び習ふ  
慶長より続く旅籠屋麻のれん  
拾はれて馬柵に風呼ぶ夏帽子

東京 岸 はじめ

まくなぎは手打ちと致す師の墓前  
青年の生き難き世や栗の花  
届きたる甕の泡盛先ず試飲  
和綴じなる解剖所見雲母虫  
わが一と世倦むこともなし書を曝す

東京 北川とも子

あてもなく空に草矢を放ちけり  
はたたがみ大地の神を騒がせて  
夏の風入れて病棟暮れ初むる  
帰途の歩を少しゆるめて梅雨の月  
豆の飯炊いて一人を満たしをり

東京 北島 明子

遠足のみんな降りたか上天気  
睡蓮のカメラ向ければつと動く  
薔薇園の石段に聴くジャズライブ  
風眩し心のありか見失ふ  
桜の実踏まねば行けずあまた踏む

兵庫 木原 今女

ハーブ園列なす日傘子等すり抜け  
高ヒール更に爪立ち薔薇を嗅ぐ  
ころんでも「あれつ」とはにかむかたつむり  
更衣今年も見付からぬまゝに  
梅雨湿り電話の声は知らぬ人

兵庫 木村 美猫

仙人掌の花透く朝ボランティアへ  
ナイターの阪神に声尽くしたる  
羅の舞妓も来たる千秋楽  
黄昏にビストロ灯る巴里祭  
スワヒリ話す未来凶夏少女

# 薬草歳時記

(一七二)

大音悦子

雲洩る日捉へ苔桃紅らむや

中島 斌雄

山を歩くと目につく赤い小さな実をつけたコケモモは本当にかわいらしい。ピンク色の、うつむき加減に咲く花もすてきた。薬用植物に取り上げられたのは、昭和十三年で、それまでは薬にするなんて誰も知らなかったという。

明治の初めに出来た「日本薬局方」にドイツの医師たちのすすめで、こけももと同じツツジ科のヨーロッパ産ウワウルシが収載された。私の持っている第7改正日本薬局方にも載っていて、この原稿を書きながら学生時代をなつかしく思い出した。

ウワウルシは膀胱炎や腎盂炎などの治療にもちいられる。その後昭和になり世界情勢が不安になり戦争の匂いが濃くなると国産奨励の名のもとにコケモモの葉がウワウルシの代用として日本薬局方にとりあげられた。(第6局)

夏から秋に葉つきの枝ごと刈り取り、蒸し器で二十分間

蒸してからとりだし、日干しにする。乾いたら、葉だけ集めてフライパンに入れ、弱火で焦げないようによくかきまぜ乾燥させる。果実はよく熟したものをそのまま採取してもちいる。

葉の中に配糖体のアルブチンを含んでおり、これが主成分である。蒸したり乾燥したりするのは、この成分が化学分解するのを防ぐためである。アルブチンが葉の中で分解してしまふと葉は黒味がかつてくる。これでは薬としての効力がない。アルブチンは加水分解によりハイドロキノンとブドウ糖になりハイドロキノンが腎細胞を刺激して利尿、防腐作用を示す。尿道防腐、利尿剤として用いられる。尿道がしみる、痛むなどの時、乾燥した葉10〜15gを一剂量として水300mlから半量になるまで煎じ服用する。果実はコケモモ酒にする。果実50g、グラニュー糖200gをホワイトリカー1.8リットルに三ヵ月以上漬け込む。就寝前に30mlを服用する。疲労回復によい。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「薬草カラー図鑑」主婦の友社

「第7改正日本薬局方」

著者略歴神戸薬科大学卒

コケモモ [スノキ属] (つつじ科)

*Vaccinium vitis-idaea* L.

苔桃

花期：6月～7月

花：短い総状花序に下垂してつく  
花冠は鐘形、4裂、白色に  
淡紅色を帯びる

薬用部分：葉

○互生、革質、倒卵楕円形

○長さ1～1.5cm



円頭、全縁

須賀  
悦子  
画



液果：球形  
(実) 紅く熟し  
食べられる



樹高：5～20cm

E. S.

岩鼻の蔭に苔桃実をこぼす

須賀  
悦子  
(ぐろっけ)

苔桃熟れ大山頂上まで少し

塩出  
眞一  
(ぐろっけ)

山の餉や花苔桃を渚とし

小林  
謙光

苔桃の咲く辺に朝の顔洗ふ

朝妻  
力

苔桃のひとつぶにすぐ隣あり

福永  
耕二

こけももの実と栗鼠の眼とまだねむし

中戸川  
朝人

倒れ木やこけももの花一面に

今井千鶴子

こけももの花ほほゑみを失はず

青柳志解樹

苔桃や水筒磁針揺れどほし

宮坂  
静生

空深む苔桃の実に色とめて

林  
翔

# 鈴の奏

品川鈴子選

柿若葉象も往きしか武佐宿を  
大阪 吉田 光子

その昔象も一泊武佐小満

迎え梅雨衣裳ダンスに若き日々

梅雨じめり反芻毎に悔い深む

水浴びに目白の来たる手水鉢  
東京 中田 芳子

梅雨寒や洗濯籠よりチョッキ出し

滝壺の底に沈みて山椒魚

舌鯉父の好みしフライ味  
兵庫 平川 倫子

母逝きてより十葉に根負けす

十葉のはな地の星か夕間暮れ

土つきの辣蕪買ひきて用多き

青時雨払ひつ辿る天上寺

朝顔の双葉に名札保育園  
大阪 古林田鶴子

指先にあくの黒じみ露御膳

あれこれの欲を切り捨て朴散華

葉櫻の影のゆらいで杖の径

愛媛 羽生きよみ

病室に新茶の香り紙コップ

退院の荷は解かぬまゝ風鈴吊る

鬼灯の花実に成らず街の庭

新緑にバイク暴走二十台  
兵庫 水上 貞子

夭折の別れを惜しみ若葉雨

時鳥何を叫ぶや夜も昼も

さくらんぼ一枝挿せり有馬籠  
兵庫 中村 吟子

上賀茂に婚の行列五月雨

時を超え繁る大木賀茂川原

梅雨に入り馴じみし川も大河めく

一輪車ひやりとさせる梅雨晴れ間

源氏物語は梅雨に借りて読む  
兵庫 小倉 綾子

千年紀源氏と明石の上出合ひ

更衣孫婚家へと帰りけり

新任の医師の再診梅雨に入る  
兵庫 竹内 千春

亡夫ねむる六甲静かに梅雨に入る

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 鈴木 てるみ 〃

\*選句は全て 品川鈴子

柿若葉象も往きしか武佐宿を

吉田 光子

曆の小満の日に近江八幡から近江鉄道で武佐駅に降り立つと、宿場のたたずまいを留める旧中山道の武佐は、瑞々しい柿若葉が眩しい。かつてこの道筋を江戸へ献上の渡来の象が初めてのし歩き、さぞ大騒ぎだったろうと感慨もしきり。象は佛の乗り物で仏画に登場するが、それまでは想像上の動物として、脚はほっそり描かれた。

滝壺の底に沈みて山椒魚

中田 芳子

滝壺の底で窪みに潜んでいる山椒魚。保護色のグロテスクな両生類で、一見気味が悪い様子ですが、巨体でもおとなしい。激しい灌にじつと耐え、粘り強くていじらしいばかり。

母逝きてより十葉に根負けす

平川 倫子

長寿を全うした母親と一緒に暮らしたが、庭の手入れは永年母まかせだったのを、先立たれてから思い知る。何故なら根深い十葉が抜けど抜けども又はびこり、遂に根負けするばかり。愚痴もこぼさず十葉を手入れした母。

指先にあくの黒じみ落御膳

古林田鶴子

繊維質が不足しがちな私達の食生活に、落は春に花茎を初夏に葉茎を食し、余りは佃煮に出来る素晴らしい食材です。落御膳から煮物、和え物、揚げ物、妙め物等々を卓上に並べたのでしょうか。しかも大事な指先を人前には出せない様に黒くしても家族の為に今日の出来ばえはと気を使う主婦ならではの佳句。

一人居に籠一パイの紫陽花挿す

羽生きよみ

大きめの籠に溢れる程の紫陽花を飾り、梅雨の鬱陶しさを逆手にとった作者の智恵。その花で一人居の心細さが一時慰められるのでしょうか。この句から昔財布が淋しくなる

と薔薇を二、三〇本胸一杯に抱えて帰り、家中に挿けると月末お金はないが心はリッチチという経験を思い出しました。勿論作者の心配事はお金ではないでしょう。

新緑にバイク暴走二十台

水上 貞子

高度経済成長の代表選手の様な車産業や高速道の整備と共に、若者達の興味関心が単車や、ツーリング、改造車等々に向きました。暴走族ではなく、単なるツーリングであつて欲しいものです。これが皮肉な事に日本の初夏の美しさを代表する新緑の中を走っているというこの取り合わせがいいと思います。無事故で帰つて来て下さい。

梅雨に入り馴じみし川も大河めく

中村 吟子

河川に対するこの感覚がとても大切です。都市化が進むと梅雨でなくても、局地的な大雨により、平素は小石とせせらぎの優しい小川も、急激な増水で深い濁流に豹変します。今夏の東京、神戸での悪夢の様な事故を想い出し、心から御悔みと合掌です。

川に馴じむと云う表現から作者の生活も想像できます。

千年紀源氏と明石の上出合ひ

小倉 綾子

日本を代表する名作源氏物語は千年経ても、人間の本質を描いているといわれています。

父上が娘を売り込み誘つても、須磨、明石では中々に源氏の気持が動かなくて、やっと明石の姫に逢つたのは旧暦八月半ば今の初秋頃ですかね。今度は姫が中々に心を開いてくれないのですね。句全体が季語の様な感じがします。このあたり目をかがやかせて読んでいる作者の向学心に見習い、私も今年は読みなおしてみます。

身も軽く借り畑菜園茄子の花

竹内 千春

本当に堅実な人生観が窺えます。

若い人にはシンプル・イズ・ベストとか、不動産を買う財力があつても貸し農園で自分の体力に合った広さを丁寧に管理し、身も軽くは名実共に無駄を省き、そして下句が千に一つの徒花もなしという茄子の花をつけているのがぴったしです。(以下略)